

# 米沢市及び周辺の和算について

千喜良英二

## — はじめに —

米沢市及び周辺の和算といえは、それは旧上杉藩の和算ということになる。上杉藩における和算家の系譜、個々の和算家の業績等については、調査の結果もすでに若干発表した。(1)

本稿では、§1で上杉藩の和算の概要と、§2で現存する資料の資料について述べる。

## §1 概 説

いままで入手し得た資料のみをみれば、上杉藩の和算は、元禄の頃、江戸詰めの藩士によって中西流が、同じく寛政の頃、奥流が伝えられたと見てよいであろう。時代区分、流派等の観点からこれを図示すれば、おおむね次のようになる。

元禄	寛政	天明	明治
中西流	奥流 移入	奥流 (城下町) 中西流 (周辺)	
1690頃	1810頃	1840頃	1910頃

山縣家文書に「中西流算巻要図」には次のように書かれている。

祖 中西文左衛門正好

江府之住。天和二壬戌年春分ノ日算数動静記著ス。

乃傳來タリ。

直傳 菅藩 山田長左衛門忠興

号正卯。享保二十年乙卯七月二十六日卒。右元禄年中於江府以御入料算術稽古右中西流之傳受奥儀爾レヨリ以來其術ヲ傳フ世ニ是羽陽中西流算術之元師タリ。

また「起壺加倭数傳」(3)の跋文にも

山田正卯先師於武江ニ傳中西流之算法ヲ以來羽陽算好え者學え。

とある。更に現存の中西流の免許を見ると、みな例外なく、山田の系譜に属している。

以上から、現時点では、山田長左衛門忠興と上杉藩における記録上の最初の和算家と見たり。(4)

山田は、藩士先祖書及び勸業(5)によれば、家督と同時に江戸の藩邸で22年間御納戸役をつとめた。寛文9年(1669)から元禄4年(1691)までである。この間に中西正好に師事したのであろう。

山田からみれば、系譜の大きな流れを追つてゆくと、6何の思斎半田郎忠寄が現われる。彼は優秀の弟子多くを擁し、藩における中西流和算家の中心的存在であつた。しかしやがて、藤田貞實一派の關流が入ってくる。寛政9頃である。

黒井は昭和2年(1965)中西流の免許を受けたが、晩年關流も學び、病死1年前の寛政10年(1798)に藤田貞實より伏羲圖の免許と受けている。(6) 時代は、藩の和算の主流が中西流から關流にかわりつつある過渡期であつた。

思斎の弟子、小林五平衛紀直は天明7年(1787)中西流免許



を受けしたが、後には南流に専念した。小林は寛政9年(1797)から同12年(1800)まで江戸の藩邸で御納戸役とつとめ、この間藩命により和算の研究を怠らなかつた。藤田貞資に師事したのである。この頃、黒井も藤田に師事していたから、小林は嘗ての中西流の師黒井と、南流に関しては同門になつたわけである。

間もなく黒井が没し、小林が藩の和算家の中心的存在になると共に、主流ははつきりし、南流に変わるのである。

「算法反正鈔」の跋文に次のように書いてある。(7)

龍川江都屈指を算家、父雄山亦算家之巨擘。紀道師事之以得其蘊奥矣即関夫子之五傳而爲我藩之嚆矢。

小林紀道と、上杉藩における南流の祖と見てもよいであろう。

このほかに、藤田貞資、嘉吉父子に師事した穴沢久藏長秀、また、藤田貞升及び小林紀道の両者に師事した小林甚兵衛直清も見逃せなからう。この二人は親交があり、それぞれ多くの弟子に教えた。

以上の時期と、南流移入時代(約40年)として特に取り上げておきたい。

しかし、城下町米沢の周辺では、黒井の系譜に属する中西流和算家の活躍があつたのである。現在の地名で言えば、米沢市成島町、東置賜郡高田町及び川西町、長井市伊佐沢、西置賜郡白鷹町及び小国町等で、中西流南流の資料が発見されている。

次に和算家の身分を見ると、資料から見る限り、下級武士と富農が多く、町人は皆無である。武士たちは藩の勘定役や代官所の諸役に就いて、村々の肝煎等の富農と共に、行政組織の末端で、藩の産業、財政等に直接結びつく仕事としていた。実績をあげた武士たちは次第に登用されて、藩の中堅として活躍するようになる。

例外も少しはあった。例えばすでに述べた穴沢長秀は、「五十騎組」(8) に属する中級武士で、家督を継ぐ前に江戸で和算の研究をし、家督を継ぐと同時に藩校の学館定詰となりエリート教育を受ける。その後小姓として藩主一族の側近に仕えるが、若くして「不調法の儀あり」ということで隠居を命じられる。そして隠居後、自由な立場で和算の研究、教授に専念するのである。

## §2 現存する若干の資料について

ここではめぼしい和算書と算額の若干について述べる。

### (1) 四角問答 (9)

これは明暦4年(1658)に中村左衛門が著したものである。3巻本であるうちは従来々々推定されてきたが、これを確認する資料がなかった。上、下2巻は知られていたが、中巻が不明だったのである。

昭和43年9月9日、米沢市李山中三角の長谷部直助氏宅で四角問答の写本が発見された。これは梨本述右衛門という藩士の書いたものである。この内容と、既に知られている上、下2巻と比較すると、明らかに中巻と思われる部分が見られるのである。今のところ、これが四角問答の中巻の内容と推定する唯一の資料である。梨本述右衛門なる人物及び書いた時期がはっきりしないが、これらについては更に検討を加えたい。

### (2) 求積及び括要算法 (10)

これらは米沢市内の古物商から入手した。いずれも「穴沢藏書」と書いてある。既述の穴沢長秀が所持していたものである。

平山諦氏の鑑定によれば、「求積」は関流宗統2代松永良弼



の自筆である。朱の訂正も松永で、岡孝和の原本と見て直接松永が書いたものであろうという。かつこれには藤田貞資の印も押してある。穴沢は藤田に師事していたから、この関係で結局穴沢に伝わったものであろう。

「括要算法」には、朱による松永良弼の、また墨による藤田貞資の書きこみのあるのが珍らしい。松永の朱書は、刊本の誤謬を正し不備を補ったものであろうという。松永がまさしく、岡の言わんとするところをとらえこれを理解したと断ずる資料として本書は貴重である。

### (3) 算額 (11)

米沢地方に掲げられた算額で判明しているものは現在14面である。この中でも6面が現存している。

記録上一番古いものは、安永8年(1779)、西置賜郡白鷹町高玉の円福寺観音堂に、東高玉村の肝煎別部庄助が掲げたものである。現存するものでは、文政8年(1825)、同じ観音堂に別部の孫弟子たちが掲げたものが一番古い。いづれも中西流で、すでに述べた黒井半四郎忠寄の系譜に属する。

前者は、西置賜郡白鷹町横田尻の小杯島男氏宅に伝わる写本「算法定率積数記」(12)にその内容が記されている。同書の一問の術文のあとに「寛政五、正月横越邑定付ノ横目ノ好ミ別部庄助盛重解」と書いてある。これからも、当時の藩の役人と肝煎の別部の和算上の交友が偲ばれて面白い。

一番新しいものは、明治18年(1885)東置賜郡川西町西大塚の八幡神社に掲げられたものである。これは岡流である。

以上米沢市及び周辺の和算の大要を述べたが、これが単なる事実関係の記述のみに終らぬよう、大方の叱咤を受けつつ、今後



も和算が現代に持ち得る意味を考へてゆきたい。

— 文献・註 —

- (1) 「戌島八幡神社の算額について」 日本数学史研究 5 卷 1 号。  
「上杉藩における和算家の系譜について」 米沢女子短期大学  
紀要 才 2 号。  
「上杉藩の若干の和算家について」 同上 紀要 才 3 号  
「円福寺観音堂の算額について」 同上 紀要 才 4 号
- (2) 和算家小林甚兵衛直清の子孫小林 仁氏（東京都在住）が、  
米沢市立図書館に寄贈したもの。
- (3) 享保 20 年（1735）藩士青山都道の著書。写本が 2 冊現存する。
- (4) §2 (1) の梨本述右衛門が山田より古いのではないかとも考へ  
られるが、目下確証はない。
- (5) 米沢市立図書館蔵。
- (6) 黒井の血統をひく山田ハル氏（仙台市在住）の好意により  
これらの免許の巻物と、他の資料と共に筆者が所持している。
- (7) 元治元年（1864）藩士今井直方の著書。5 巻。今井は明治 32  
年（1899）まで著書を出した。
- (8) 上杉景勝の直臣の子孫で編成された。のちには功績のある下級  
藩士が、二代限り組入れられたこともある。
- (9) 昭和 44 年 4 月、本書を謄写復刻した。巻末に若干の解説を加えた。
- (10) 近く平山諦、松岡元久氏等により関孝和全集が刊行  
される。これに本書の記述がある。
- (11) 平山・松岡編「山形の算額」（昭和 41 年発行）及び  
松岡・千喜良編「山形の算額（続）・山形県算家名鑑」（昭  
和 43 年富士短期大学出版部発行）参照。その後の調査で 5  
面（4 面が現存）が発見された。